

協会と学会 —日本メンデル協会第一回大会によせて—

河野重行 (公財)日本メンデル協会会長



AIの普及もあってネット検索が楽になっています。AIを特段意識しなくても従来の検索サイトで、例えば「世界最古の学会は…」と入力したら、「英国王立協会として広く知られる「自然についての知識を改善するためのロンドン王立協会」は、現存する最も古い学会であり、科学出版社でもあります。王立協会は1660年に設立され、協会発行の学術誌「フィロソフィカル・トランザクションズ」は1665年に創刊されました。」と、フックやニュートンで有名な王立協会が紹介されました¹⁾。「日本最古の学会…」とすると、物理学会と数学会で、両学会とも1877年(明治10年)に創立された東京数学会社が始まりだそうです。植物学会はその5年後の1882年に小石川植物園で設立しています。

検索を続けていると、AIは勝手に「学会とは? 設立の要件と日本の学会の状況…」などというサイトを探し出してくれます。そこには「学会と並んで協会と呼ばれる団体も多いので、学会と協会の違いについても認識しておきましょう。」とあって、「学会の会員が研究者の集まりであるのに対し、協会にはその必要がなく、学会誌などの発行や研究成果の発表をする必要もありません」とあって、最後に「設立者の理念を共有する仲間が、その想いを普及させていくために活動しています。」とありました。

日本メンデル協会が任意団体として設立されたのは、40年前の1984年12月10日のことで、その目的は「遺伝学の祖メンデルの業績を顕彰し、国際的に情報を交換し、遺伝学の資料を公開して世界の平和と繁栄をはかる」ことにありました。設立者の東京大学名誉教授で国際基督教大学元学長の篠遠喜人初代会長の夢は「メンデル記念館を設立し、メンデル個人に関する大小の資料ならびに日本における遺伝学の発達の資料を集めて展示し、かつ国際的な交流を促すほか、遺伝学とその教育との普及発展に寄与したい」というものでした。

1985年には長野県教育委員会を主務官庁とする財団法人に指定され、メンデル協会通信も創刊されました。1990年、田中信徳第2代会長になると、任意団体であった国際細胞学会が日本メンデル協会に加わり、その機関誌であったキトログリア(CYTOLOGIA)の刊行母体となりました。1998年にはJ-STAGEでの公開を開始しています。2013年9月2日には公益財団法人に認定され今日に至っております。こうした一連の改革の中で一番大きかったのはキトログリアの刊行母体になったこと、つまりキトログリアが日本メンデル協会の機関誌になったことでしょう。

日本において、国が公的に学会に指定しているのは、政府の諮問機関である「日本学術会議」の「日本学術会議協力学術研究団体」です。2020年10月に任命権者である菅義偉首相は理由を明かすことなく、学術会議が推薦した105人のうち6人を除外したことが発覚して大問題になったので、皆さんもよくご存知かもしれません。その学術会議が、学会からの申請を受け、下記の3つの要件を満たす場合に日本学術会議協力学術研究団体(学会)として認定されます。日本学術会議から学会として指定を受けるためには、下記の4つの要件を満たすことが必要と定められています。

1. 学術研究の向上発達を主たる目的として、その達成のための学術研究活動を行っていること
2. 活動が研究者自身の運営により行われていること
3. 構成員(個人会員)が100人以上であり、かつ研究者の割合が半数以上であること
4. 学術研究(論文等)を掲載する機関誌を年1回継続して発行していること

『日本学会名鑑』によると公的に認められている学会は現在2,000団体を超えているようです。さて、問題は、日本メンデル協会は学会かということなの

ですが、キトログリアはありますし、3と4は確実に満たしています。ただ、1と2は抽象的で分かり難いのですが、何のことだと思われませんか？ 具体的には大会や総会を指すようです。それは申込書を見ると活動状況の欄に「機関誌」と並んで「会合」があって、年次総会、全国学術大会、公開講演会などと書かれていることから分かります。

この日本メンデル協会通信40号は、記念すべき第1回大会の特集号です。会期中に総会も開催され会務報告はもちろんキトログリア奨励賞や第1回大会ポスター賞の授賞式なども執り行いました。次ページの「大会プログラム」「奨励賞受賞者からのメッセー

ジ」、松永幸大会実行委員長の「日本メンデル協会第1回大会報告」をご覧ください。これで日本メンデル協会は名実ともに「学会」になったこととなります。今後は、協会らしい夢の実現を目指すとともに、学会らしく学術研究の向上発達を主たる目的として会員の皆様の学術研究活動を支援していきたいと決意しております。

文献

1. 中島秀人「ロバート・フック ニュートンに消された男」朝日選書 pp312 (1996)

日本メンデル協会第1回大会プログラム

期日：2024年6月15日（土）

会場：日本女子大学（目白キャンパス）新泉山館



特別招待講演

「メダカとメンデル遺伝」

成瀬清（基礎生物学研究所）

奨励賞受賞講演

「イネの幹細胞と形態形成に関する発生遺伝学的研究」

田中若奈（広島大学）

「植物細胞における適切なセントロメア配置の形成機構と意義の解析」

坂本卓也（神奈川大学）

「とことん海藻種苗生産 ー大きなバイオマスを支える微小世代の科学ー」

佐藤陽一（理研食品）

「単細胞藻類における細胞と葉緑体の分裂の協調」

墨谷暢子（新潟大学）

一般招待講演

「深海微生物に関する電子顕微鏡的研究」

山口正視（千葉大学）

「巨大細胞性藻類の細胞壁表面微細構造の原子間力顕微鏡による観察」

峯一朗（高知大学）

「ヘマトコッカス藻色素アスタキサンチンの産業利用に資する培養法とロバストスクリーニング」

竹下毅（東京大学）

「GPCRを介した生理活性脂質の働きについて」

後藤真里（帝京大学）

「改変型転写因子を用いたシロイヌナズナのホルモンフリー不定芽・不定胚誘導時の細胞学的観察」

池田美穂（福井県立大学）

「クマノミ亜科魚類の染色体進化」

高井明徳（大阪信愛学院大学）



大会会場となった日本女子大学新泉山館

ポスター発表

- P-01 原色素体からエチオプラストへの分化プロセスにおける膜構造の超微構造解析
 ○大目歩果¹・上床理紗¹・小林啓子¹・高橋綾子¹・大崎有美¹・秋田佳恵^{1,2}・藤井祥³・小林康一⁴・永田典子¹
¹日本女子大・院理、²日大・生物資源、³弘前大・農生、⁴大阪公立大・院理
- P-02 エチオプラストから葉緑体への分化における膜脂質変異体の超微構造学的解析
 ○上床理紗¹・大目歩果¹・小林啓子¹・高橋綾子¹・大崎有美¹・秋田佳恵^{1,2}・藤井祥³・小林康一⁴・永田典子¹
¹日本女子大・院理、²日大・生物資源、³弘前大・農生、⁴大阪公立大・院理
- P-03 ステロール過剰蓄積が花粉形成に与える影響
 ○小林啓子¹・秋田佳恵^{1,2}・鈴木優志³・島田貴士⁴・永田典子¹
¹日本女子大・理、²日大・生物資源、³大妻女子大・社会情報、⁴千葉大・院・園芸
- P-04 トレニアフリル変異体 frilly petal undulation1 の花弁における維管束の形態異常
 ○黛隆宏¹・石井公太郎²・畑下昌範³・高城啓一³・阿部知子⁴・風間裕介^{1,4}
¹福井県大院・生物資源、²量研機構・放医研、³若エネ研・生物資源、⁴理研・仁科センター
- P-05 シロイヌナズナの発達ステージに依存した遺伝子発現と核内構造の変化
 ○兵度友誉¹・西嶋遼¹・Jeffrey Fawcett²・門田満隆³・工楽樹洋⁴・風間裕介^{1,5}
¹福井県大・院・生物資源、²理研・iTHEMS、³理研・BDR、⁴国立遺伝学研究所、⁵理研・仁科センター
- P-06 シロイヌナズナにおける重イオンビーム誘発ゲノム再編成の構造決定
 ○鶴飼優葉¹・西嶋遼¹・Jeffrey Fawcett²・坂本卓也³・杉田和陽¹・生駒拓也¹・兵渡友誉¹・田中裕之⁴・伊藤武彦⁴・阿部知子⁵・松永幸大⁶・風間裕介^{1,5}
¹福井県大・院・生物資源、²理研・iTHEMS、³神奈川大・理、⁴東工大・生命理工、⁵理研・仁科センター、⁶東京大・院・新領域
- P-07 雌雄異株植物ヒロハノマンテマの性決定遺伝子 GSFY の獲得における CLV3 オーソログの機能分化
 ○小林壮生¹・鬼頭萌¹・西嶋遼¹・池田美穂¹・Dmitry A Filatov²・風間裕介^{1,3}
¹福井県大・院・生物資源、²オックスフォード大・生物、³理研・仁科センター
- P-08 ナデシコの花芽において接触刺激に応答して発現する遺伝子群の同定
 ○畑中悠那¹・西嶋遼¹・小林壮生¹・篠山治恵¹・池田美穂¹・風間裕介^{1,2}
¹福井県大・院・生物資源、²理研・仁科センター
- P-09 植物のシュート再生に関するプライミング複合体の機能解析
 ○半田和華¹・佐藤輝¹・坂本卓也²・野澤彰³・澤崎達也³・松永幸大¹
¹東大・院・新領域・先端生命、²神奈川大・理・理、³愛媛大・PROS
- P-10 Analysis of a blue light receptor CRY1 during plant regeneration
 ○Min Li¹・Hikaru Sato¹・Takuya Sakamoto²・Yayoi Inui¹・Kazunari Yamamoto¹・Tomonao Matsushita³・Sachihiko Matsunaga¹
¹Grad. Sch. Frontier Sci., Univ. Tokyo, ²Grad. Sch. Sci., Univ. Kanagawa, ³Grad. Sch. Sci., Univ. Kyoto
- P-11 動物培養細胞と微細藻類を用いた細胞内共生へのアプローチ
 ○小玉智恵¹・澤田幸希¹・乾弥生¹・松永幸大¹
¹東大・院・新領域・先端生命
- P-12 動物培養細胞とシアノバクテリアの共培養による一次共生系の構築
 ○石田萌音¹・小玉智恵¹・乾弥生¹・仮屋園遼²・松永朋子¹・小山内崇²・丸山真一朗¹・松永幸大¹
¹東大・院・新領域・先端生命、²明治大学・農学
- P-13 CHO-K1 細胞におけるクロロフィル合成経路の構築によるクロロフィル a の生合成
 ○小島龍弥¹・松永朋子¹・墨谷暢子²・和田直樹³・刑部敬史³・松永幸大¹
¹東大・院・新領域・先端生命、²新潟大・理・理、³徳島大・生物資源産業・生物育種
- P-14 動物培養細胞に取り込まれた微細藻類の細胞生物学的解析
 ○アベディンシャブニルイシラク¹・澤田幸希¹・乾弥生¹・松永幸大¹
¹東大・新領域・先端生命

P-15 ライブイメージング解析に基づく・シロイヌナズナ受精卵の極性的な伸長機構の解明
○松本光梨¹・康子辰²・中川朔未¹・野々山朋信²・石本志高³・檜垣匠⁴・津川暁²・植田美那子¹

¹ 東北大・院・院生命科学、² 秋田県大・システム、³ 佐賀大・理工、⁴ 熊本大・IROAST

P-16 シロイヌナズナの様々なエコタイプにおけるセントロメア配置の解析

○矢野賢人¹・坂本卓也¹

¹ 神奈川大学理学部

P-17 稲沢市祖父江町のイチヨウ品種の形態比較
呂虹橋¹・澁谷龍弥²・小林正美²・山下博史³・内田美重^{1, #}・井上和仁^{4, 5}・内田英伸^{1, 5}

¹ 名古屋文理大学・フードビジネス、² 筑波大学・物質工学域、³ 京都府立大学・環境理、⁴ 神奈川大学・化学生命、⁵ 神奈川大学・総理研、
現職：名城大学・院・総合学術

P-18 植物組織のサンドイッチ凍結・凍結置換法による電顕観察

○山口正視¹・佐藤繭子²・高橋 梓¹・豊岡公徳²・知花博治¹

¹ 千葉大学・真菌医学研究センター、² 横浜理研

P-19 コムギ、エンバクとチカラシバ属間での亜科間交雑の雑種初期胚で起こる染色体脱落

○石井孝佳¹

¹ 鳥取大学国際乾燥地研究教育機構・乾燥地研究センター

P-20 ヘマトコッカス 26 株のアスタキサンチン生産性と重イオンビーム照射株のロパストスクリーニング

○竹下毅¹・瀧田香織¹・三浦昌也¹・鈴木辰也¹・阿部知子²・河野重行¹

¹ 東大・院・新領域、² 理研・仁科センター



ポスター発表受賞者と永田典子大会会長



ポスター会場の様子

日本メンデル協会第1回大会の報告

松永幸大 (大会実行委員長)



日本メンデル協会会員、迅速な情報交換と会員相互の交流と学術研究の向上発達を図ることを目的として、第1回大会が2024年6月15日に日本女子大学・新泉山館において開催されました。当日は天候にも恵まれ、65名の方々が参加されました。午前中は、20演題のポスター発表が行われ、活発な議論が展開されました。午後からは、大会議室において、山口正視会員 (千葉大学)、峯一朗会員 (高知大学)、竹下毅会員 (東京大学)、後藤真理会員 (帝京大学)、池田美穂会員 (福井県立大学)、高井明徳会員 (大阪信愛学院大学) による6演題の一般招待講演が行われました。そのあと、午前中のポスター発表の中から、厳正な審査により、ポスター優秀賞を決定しました。ポスター発表優秀賞を受賞した4名の会員は以下の方々です。

石田萌音 (東京大学)、大目歩果 (日本女子大学)、小玉智恵 (東京大学)、松本光梨 (東北大学)

そのあと、奨励賞受賞者である田中若奈 (広島大学)、坂本卓也 (神奈川大学)、佐藤陽一 (理研食品)、墨谷暢子 (新潟大学) による受賞講演が行われました。最後に、成瀬清会員による特別招待講演「メダカとメンデル遺伝」がおこなれ、日本メンデル協会の第

1回大会の最後を飾る素晴らしい講演を聞くことができました。イメージング、顕微鏡技術、分子生物学、バイオインフォマティクスなどのさまざまな研究方法を駆使した、細胞学、細胞遺伝学、細胞生物学、遺伝学の分野の研究発表を聞くことができ、日本メンデル協会会員の研究力の力強さを再認識した大会となりました。

講演終了後、議論の場を七十年会館に移し、懇親会を開催致しました。河野重行会長のご挨拶に続き、黒岩常祥名誉会員の乾杯の挨拶により、懇親会が開始されました。若手研究者からシニアの研究者まで、幅広い世代の会員が会食しながらディスカッションを通じて、親交を深めることができました。

大会会長の永田典子会員の尽力により、大会開催決定からわずか3か月の短時間で準備を行い、盛況な大会を催すことができました。永田典子・大会会長と、日本女子大学の永田研究室の皆様には、この場を借りて厚くお礼申し上げます。来年度の大会は6月中旬に福井市において福井県立大学の風間裕介会員が大会長を務め開催されます。会員の皆様のご参加をお待ちしております。

キトロギア奨励賞受賞者メッセージ



CYTOLOGIA 奨励賞を受賞して
広島大学大学院統合生命科学研究科 田中若奈
(第8回 CYTOLOGIA 奨励賞受賞者)

この度、CYTOLOGIA 奨励賞を受賞することができ、大変光栄に思います。本協会の皆さま、そしてこれまでご指導、ご協力を賜りました先生方ならびに関係者の皆さまに、心よりお礼申し上げます。

私は大学院時代より一貫して、イネの発生遺伝学分野の研究に専念してまいりました。特にポストク時代から着手したイネの分枝形成時の幹細胞維持に関する研究では、独自の視点から研究を進め、従来シロイヌナズナで提唱されていた仕組みとは異なるイネ特有の仕組みが働いていることを明らかに致しました。この成果を高く評価して頂けましたことは大変嬉しく、今後の研究への大きな励みとなります。

現在は、従来の研究をさらに発展させるとともに、新しいプロジェクト研究にも取り組んでおります。このプロジェクトでは、周囲の環境に応じたイネの形態形成の仕組みを解明し、将来的には気候変動に強いイネ品種の開発を目指しております。

記念すべき今回の第1回大会に参加させて頂き、小規模ながら非常にアットホームで温かい雰囲気の大会であると感じました。普段はなかなかお話しする機会のない先生方とディスカッションを行う多くの若手研究者の姿を拝見し、非常に有意義な発表の機会であったと実感致しました。

最後に、この素晴らしい賞に感謝をしまして、今後も楽しみながら研究に励んでまいりますので、変わらぬご指導とご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

新たな決意

神奈川大学理学部 坂本卓也
(第9回 CYTOLOGIA 奨励賞受賞者)

この度は第9回 CYTOLOGIA 奨励賞を賜り、大変光栄に感じております。ご推薦いただきました松永幸大先生、並びに審査していただいた選考委員の先生方に心より御礼申し上げます。また、本賞に相応しい研究成果を達成できたのは、ひとえに私を指導してくださった先生方、一緒に研究を進めてくださった学生や技官の皆様、そして互いに切磋琢磨し合った研究者仲間の皆様のお陰であり、心より感謝いたします。

さらに、記念すべき日本メンデル協会第1回大会にて受賞講演の場を設けていただいたことも大変光栄に感じております。奇しくもこの日は、翌日からの国際学会への参加のためメンデルが学んだチェコ・オロモウツのバルツキー大学へと向かう日でもありました。日本メンデル協会の大会とオロモウツへの旅が重なり、まるでメンデルに導かれたような（そんなはずはありませんが）、これまでの中で最も印象深い学会参加日となりました。

私の研究者人生は、学部生で研究室に配属された2003年12月をスタートとすると、今年で20年目となります。この20年間、アレロパシーに始まり、重金属のファイトレメディエーション、植物栄養の毒性、DNA 損傷、クロマチン動態、染色体構造、シュート再生、そして塊根の発生など様々な研究を興味の赴くままに自由にやらせていただきました。改めて思うと、恵まれた研究者人生を過ごしてきたと感じております。一方で、多様な研究をしてきた（いる）ために、「あなたは何を専門とする研究者ですか?」という問いに自信を持って答えることができないままでおりました。今回の受賞は、植物のクロマチン動態・構造に関する研究成果を高くご評価いただいたことであり、勝手ながら私の研究者としてのアイデンティティの確立を後押ししてくれたものと感じております。今後は胸を張って、植物のクロマチン動態・構造の専門家であると答えたいと思います。

第1回大会の受賞式において河野重行会長から、「CYTOLOGIA 誌には、こんな凄い研究者も論文を載せているんだよ、と言われるような凄い研究者になってください」といった励ましのお言葉をいただきました。これからは、このお言葉を胸に刻み、自分の専門性を高めることに精進し、“凄い”研究成果を達成できるよう努めていきたいと思っております。

とことん海藻種苗生産

理研食品株式会社
取締役・原料事業部長 佐藤陽一
(第10回 CYTOLOGIA 奨励賞受賞者)

この度は、第10回キトログア奨励賞に選出いただき、誠にありがとうございました。また、日本メンデル協会第一回大会での講演の機会も頂戴しましたことを、あらためて御礼申し上げます。

私は大学では海藻の研究室を選び、修士課程まで進んだものの、博士課程に進学する決心がつかないまま就職しました。その後、国および大学を経て企業で仕事を始めた当初は海藻原料の調達や商品開発などを行っていました。研究に対する未練を抱えながら過ごす中で、転機は2011年の東日本大震災でした。大学時代から携わってきた三陸沿岸の大きな被害を目の当たりにし、後世にすこしでも役に立てるような仕事がしたい、論文として記録していつかだれかのために役に立てるような研究がしたい、と決意しました。そんな折に出会ったのが理化学研究所の阿部知子先生、風間裕介さん（福井県立大学）、平野智也さん（宮崎大学）でした。研究の基礎を十分に学ばずに大学を出てしまった自分にとっては、研究のイロハを一から学ぶ貴重な機会になりました。そして、阿部先生から東京大学の河野重行先生をご紹介いただき博士課程に社会人学生として入学、2016年に学位を取得しました。河野先生の指導の元で能動的に研究に取り組む研究室の学生の皆さんに大いに刺激を受けましたし、竹下毅さん（京都大学）や田中若奈さん（広島大学）など、分野の異なる研究者の皆さんと交流できたことは今も大きな励みになっています。今回の第一回大会でもお二人をはじめとする研究者の皆様のご講演を拝聴して多くの成果を目の当たりにし、大変ありがたい刺激をいただきました。

今回の受賞者講演のタイトル「とことん海藻種苗生産」は、河野先生が最近ご講演タイトルでよくお使いになっている「とことんバイオリファイナー」から拝借したものです。山中伸弥先生が紹介されているロバート・マーレー先生の言葉「Vision & Work hard」にも通ずるものがあると思っています。「とことん」には、近年問題となっている「働き方改革」やら「ワークバランス」など、研究とは共存が難しい様々な事案を優しく包みこんでくれる力がありますね。「とことん」やってみて、「てんでこまい」になるくらいがちょうどよいバランスなのでは？そ

の先にはきつと、「のんびり」休んで次への英気を養えることでしょう。

養殖・天然ともに減少著しい海藻類の資源量を維持し、海藻産業を守るためには、その元となる種苗生産の安定化が欠かせません。今後も、今回の受賞を励みとし、とことん研究して、その成果を産業実装できるよう精進してまいります。

第 10 回キトログア奨励賞を受賞して

新潟大・理 墨谷暢子

(第 10 回 CYTOLOGIA 奨励賞受賞者)

この度は節目となる第 10 回キトログア奨励賞を受賞させていただき大変光栄に存じます。審査にあられました先生方、推薦いただきました東京大学の松永幸大先生に御礼申し上げます。また、大学院の指導教員である、河野重行東京大学名誉教授、今回の受賞に大きく繋がる研究を手掛けはじめる機会を与えていただいた国立遺伝学研究所の宮城島進也教授をはじめ、これまで在籍した研究室の皆さま、共同研究でお世話になった皆さまにこの場を借りて改めて厚く御礼を申し上げます。

キトログアとの出会いは博士課程のころに、河野

先生がキトログア編集長に就任されたころに遡ります。その後、修士課程のときの研究をキトログアで発表させていただく機会にも恵まれました。紆余曲折を経て 2022 年 12 月より現職場にて独立 PI の職を得ることができましたが、今回の受賞は選考委員の先生方からの、PI の職を得たからと甘えることなく励むようにという意味合いであると捉え、キトログアをはじめとし研究論文を継続して発表できるよう邁進していきたいと思っております。今後とも変わらぬご指導のほど、どうぞよろしくお願い致します。

この度受賞講演の機会を与えていただきました第 1 回大会には、所用により途中から参加させていただきましたが、一般招待講演および奨励賞受賞講演では、最新の研究成果だけでなく、発表者の先生方の研究の歴史をも感じられる発表が多く、興味深く聞かせていただきました。特別招待講演では（個人的に学生実習で扱ったこともあったため親しみのある）メダカの研究の今昔を知ることができ、改めて勉強になりました。末筆ではございますが大会会長の永田典子先生、実行委員長の松永幸大先生はじめ、大会運営にご尽力された関係者の皆様にはこのような機会を与えていただきましたこと御礼申し上げます。



奨励賞受賞者と河野重行会長

2024年 日本メンデル協会カレンダー

2月29日	第52回理事会
3月21日	第24回評議員会
3月26日	CYTOLOGIA Vol.89-1号
5月25日	第53回理事会
6月15日	第25回評議員会
6月15日	日本メンデル協会第1回大会・総会開催 (第8, 9, 10回キトログリア奨励賞受賞記念講演会) 於日本女子大学
7月2日	CYTOLOGIA Vol.89-2号
9月27日	CYTOLOGIA Vol.89-3号
11月12日	第54回臨時理事会
12月17日	内閣府立入調査実施
12月25日(予定)	CYTOLOGIA Vol.89-4号

編集後記

日本メンデル協会通信の40号をお届けします。今回は、日本メンデル協会第一回大会の特集号となっています。また、当大会で受賞講演をされた4名の奨励賞受賞者の方からのメッセージも掲載しています。日本メンデル協会の1年間の活動が伝わるものとなっていけば幸いです。一方で、日本メンデル協会第7代会長で、長年協会通信の編集長も務められておられた長田敏行先生による寄稿が無くなり、寂しい思いの方もいらっしゃると思います。私もその一人であるわけですが、そのような時には、長田先生の「メンデルの軌跡を訪ねる旅(裳華房) <https://www.shokabo.co.jp/mybooks/ISBN978-4-7853-5123-6.htm>」がお勧めです。当協会通信の中でも参考文献として何度か挙げられていましたが、長田ファンでまだ読んでいないという方にはびっぴりの一冊と思います。ホームページには、常脇恒一郎先生の素晴らしい推薦文も載っています。

この本でも足りない、という方は、「イチョウの自然史と文化史(裳華房) <https://www.shokabo.co.jp/mybooks/ISBN978-4-7853-5857-0.htm>」をどうぞ。

高野 博嘉

